



Title	中小企業のモダニズム（1）：京都の家具メーカー 二葉家具工業
Author(s)	谷本, 尚子
Citation	デザイン理論. 2017, 69, p. 58-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65019
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中小企業のモダニズム(1)

— 京都の家具メーカー 二葉家具工業 —

谷本尚子／京都市立芸術大学非常勤講師

1. はじめに

日本のモダンデザインの研究の多くは、メディアで言及された著名なデザイナーの名作を軸に価値を位置づける方法がとられてきた。しかし今日、地域社会との連関で、モノの文化の差異を活かしていこうとする研究も多く見られるようになってきた。

発表では、昨年度より調査に入っている二葉家具を取り上げ、地域中小企業においてモダンデザインがどの様に受容され、製品として生み出されていったのかを概観した。

2. 室内装飾業から家具メーカーへ

二葉家具は、1921年三条寺町付近に室内装飾業を請け負う大槻商会として創業し、1943年に二葉工業として事業登録する。これは天童木工が設立したのと同時期である。日本の有名家具メーカーは、戦時生産体制の一環として創業された例が多い。

初期の二葉家具は、洋家具や工作機械台などを中心に製造していた。戦後復興期には、官庁や企業の内装に伴う注文家具の製作が主な仕事であり、鏡台や小イス、机、応接セットなどが主な商品であった。転機が訪れたのは、1948年頃に井尻隆一が社長に就任した頃と考えられる。

1949年、寺町夷川に店舗を構え、注文生産だけでなく店頭販売を始めた。また1950年代半ばから1960年代には、四条繁栄会の店舗へ什器を納入したり、大丸や高島屋の木工部の下請けをしたりしていたようである。

1959年には工場を西京極に設立、フラッシュ工法を導入し、低価格家具生産を可能にした。これ以降二葉家具は、下請け或いは少

量注文家具だけではなく、一般消費者向けの市場への参入を念頭において展開していく。

3. オリジナル家具の模索

西京極の工場生産性を日建にアピールした二葉家具は、1960年の京都会館の食堂内装の業務を落札した。この時の日建への営業を通じて、二葉家具は空間デザイナーの山本敏郎と出会う。山本敏郎は、オリジナル家具の製造を考えていた川尻社長に、東京の消費者をターゲットにした、「京都らしさ」をデザインするようにアドヴァイスした。

1971年に開催された「フタバオリジナルファニチャー展示会」では、山本の他に2名のデザイナーが紹介され、二葉が家具メーカーとしてどの様にアイデンティティを確立しようとしていたのかを、伺い知ることが出来る。

山本敏郎(1924-2009)は、京都生まれ、東京美術学校を出た後、1953年に日建設計が家具・インテリア部を創立した年に入社し、1965年に東京芸術大学の講師となっている。並行して二葉家具の指導を行い、京都市立美術大学の非常勤講師でもあった。山本は展示会によせて次のように述べている。「〈木=京都=家具〉と三つの要素を結びながら〈二葉の家具〉を作り続けて、はや8年になりました……。」モダンな木製洋家具でありながら、そこに「京都」というアイデンティティを付加する試みは、二葉の基本方針を支えていた。

水之江忠臣(1921-77)は、1942年に前川國男建築設計事務所に入所する。京都会館食堂の家具製作を二葉が落札したのが縁で、二葉のオリジナル家具を手がけるようになった。彼は二葉家具の企業体質について、次のよう

に述べている。「デザインが商品として特定市場で成功するか、否かは、経営者のデザイナー理解と、自社の企業体質を生かし得る会社であるかどうかである。」水之江のデザインは、生産性を考慮し、且つ誠実さを損なわない優美さを持っており、現在も二葉オリジナル家具の主力商品である。

原好輝（1934-）は、木工家具を専門にしていたデザイナーである。東横百貨店の家具設計室に勤務し、顧問の宮内順治、剣持勇の両氏に強く影響を受けた。彼は「二葉工業はこの氾濫と混沌の現状の中で、独自の道の確立に努力をしている。」と述べており、彼のHADOシリーズは、オリジナル家具の中でも独自の造形力に富んでいる。

展示会の資料の中に、吉田光邦（1921-1991）による「有機性の回復を」という単文がある。「……この人間に対応する環境の有機性の回復を、今日のデザインは見定めねばなるまい。その方向の発見を、私はこの家具のなかに期待するのである」。日本の工芸技術史に造詣の深い吉田の言葉を掲載している点、二葉家具が生産技術に着目し、オリジナル家具を開発していたといえるだろう。

4. 二葉家具の評価と北欧家具

1970年代は、大阪での万国博覧会開催を始め、関西経済も比較的急速な伸びが見られた時代である。生活が豊かになるにつれ、一般生活者にも良質な中級家具への需要が高まる。

1972年、松屋で「日本の家具シリーズ」展が開かれ、二葉の家具は天童木工や秋田木工と並んで展示された。二葉家具を紹介するパネルで、原弘は次のように書いている。

「《京家具》の魅力は日本の指物の技術から生まれた繊細さと、みやびであろう。二葉工業はそうした技術が未だに受け継がれ、それらが存在し得る京都という地の利を生かして出発したものから、近代の家具に求められ

るものが何であるかに応えようと、原好輝、水之江忠臣、山本敏郎という三人のデザイナーとともに地道で、真摯な道を歩いてきたメーカーである。」二葉は京都の独自のスタイルを持つオリジナル家具メーカーとして認知されたといえる。

1975年、二葉はフィンランドの家具メーカー ALTEK の国内最初の総代理店契約を結んでいる。これは部材を輸入し製品として販売する為の品質管理・技術において、二葉が評価されたからだと考えられる。二葉が北欧家具に関心を持ったのは、水之江の影響である。また1970年半ばから、中級の洋式家具による良質な生活空間を求める需要の高まりを反映している。北欧のモダニティと自社製品との並列は、京都の都市文化に溶け込んだといえるだろう。

1980年代、北欧ブームの衰退により、二葉は社内デザイナーによる家具製作に取りかかる。オリジナル家具を模索する中で不等厚成形による実用新案を提出し、技術開発による独自性の試みに着手した。その一つは Made in Kyoto のベストデザイン賞を受賞する。

5. おわりに

これまで二葉家具は、京都という地域社会のアイデンティティを重視しながら、技術開発によるオリジナル家具の製造を模索してきた。この点について今後さらに精査する必要があるだろう。

参考文献

- 1 『匠の伝承 宮崎木材工業50年史』、平成3年10月。
- 2 『日本の木の椅子』別冊商店建築78、商店建築社1996年。
- 3 菅澤光政編著『天童木工』美術出版社、2008年。
- 4 渡邊秀一著「近代京都における商業地域の存在形態——四条通の商店街形成プロセスを視野に入れて——」仏教大学総合研究所紀要 第22号 pp.49-64。